「底が突き抜けた」時代の歩き方 484

どこにも行けない「成熟社会のつまらなさ」

　イラクで銃撃されて亡くなった橋田信介さんの『イラクの中心でバカとさけぶ』に目を通すと、その中にこんな一節がある。
《３０分、４０分たってもまだ戦闘は続いている。
　それにしても、今日は本当に長い一日だった。３、４年分を２４時間で生きた気分にさせられる。同時に、やっぱり生きていてよかったと思う。こういう体験にめぐりあったことに感謝しなければと思う。人生は、ほとんどがつまらないもの。でも、時々こういう面白いことに遭遇する。だから、生きるのだ。》
《平和な日本では、自分は確かに生きているのだと実感することはむずかしい。なんの変哲もない日常生活に埋没して、それが確認できないからだ。
　でも、戦場は違う。イヤというほど死ぬ目にあう。その極限状態が、逆に生きている実感を与えてくれる。
　一酸化中毒で自殺する若者よ、「青年よ大志を抱いて戦場に行こう」。
　木炭は自殺するためにではなく、ヤキトリを焼くためにある。
　日教組の先生よ、イジメで精神の均衡を失った「教え子を戦場へ送ろう」。
　戦場で生きる意味を発見させ、命の尊さを学習させようではないか。》
　イラクで拘束されて首を切断された２４歳の香田証生さんのテレビに映しだされたビデオ映像が、ここで浮かび上がってくる。彼はどうしてイラクに赴いたのだろう。「自分の目で見てみたい」と、イラク入りしたことだけが伝えられている。一体、戦場で起こっていることの「なに」を、「自分の目で見てみた」かったのだろうか。おそらくそれは、自分の心と身体でもって戦場というものを実感してみたい、ということではなかったのか。もしそうであるなら、橋田さんがいうように、《平和な日本では、自分は確かに生きているのだと実感することはむずかしい。なんの変哲もない日常生活に埋没して、それが確認できないからだ》ということになるだろう。死に直面している戦場の《極限状態が、逆に生きている実感を与えてくれる》ということだ。還暦を迎えた老ジャーナリストがそう思うくらいだから、２０代の若者が《平和な日本では、自分は確かに生きているのだ実感することは》、到底むずかしいだろう。
　日本の自殺件数が平成二年に約２万件だったのが、増え続けて１０年に約３１７００件になり、一旦減少したものの再び増え、１５年には約３万２千件だった。警視庁が最

近まとめた１６年の国内自殺者数を職業別にみると、企業の管理職が６５４人、被雇用者は７８９３人を占め、バブル経済ピークの平成元年ごろと比べて、管理職は２倍近く、被雇用者は１・５倍以上増えている。全自殺者のうち被雇用が占める割合は２４・４％で、無職者の４７・８％に次ぐ二番目の多さだった。自殺の理由では負債や生活苦など経済・生活問題が目立ち、前年に比べて管理職、被雇用者ともに自殺者数自体は減少しているとはいえ、依然として中・高年自殺者の多さは、日本が、《自分は確かに生きているのだと実感することはむずかしい》国であるだけでなく、生きていくこと自体がむずかしくなっている国であることも浮かび上がらせている。

「青年よ大志を抱いて戦場に行こう」という橋田さんのキャッチコピーに引かれたわけではなかろうが、香田さんは「大志を抱いて戦場に行」き、拘束されて殺害される悲劇に見舞われることになった。およそ戦場に踏み入るのに似つかわしくない軽装姿で歩きまわる香田さんの首を刎(は)ねた実行犯にインタビューする機会を得たジャーナリストの金子貴一は『文藝春秋』（０５．２）で、次のような証言を引き出している。なお彼は、橋田さん殺害事件の武装グループへのインタビューをも行った人物である。

《質問者が、「香田さんはまったくの民間人であり、旅行者だ。殺されるような悪いこともなにひとつしていない」と反駁すると、Xはこう答えた。

「我々も、パスポートを見て彼が民間人であることを知った。しかし、いまは戦争中だ。歴史上、どの戦争にも犠牲者は存在するものだ。この戦争でも毎日、米軍に殺されてイラク市民に犠牲者が出ているではないか。

　それに、一体どんな旅行者がいまのイラクにいるというのだ！　ここは戦場だぞ！

香田は旅行者を装って、日本政府からイラクに送り込まれたスパイだ。彼がイスラエルからイラクにきたのがその証拠だ。

　しかし、だから我々は香田の首を刎ねたのではない。日本政府がそうさせたのだ。日本政府は香田を送り込んでおきながら、我々の要求を無視した。》

　香田さんがイスラエル経由でイラク入りしたことについても、こう記されている。

　《連合国暫定当局（ＣＰＡ）は昨年２月、「ザルカウィの手紙」という長文を公表したが、そこには、「（アメリカのイラク侵略の目的は）ナイル川からチグリス・ユーフラテス川までを支配する拡大イスラエル国家の建設を早めるためだ」と記されている。

　日本人にとっては突飛ともいえる「ユダヤ陰謀論」だが、アラブでは、これがだれもが知っている「常識」なのだ。

　アラブ諸国で最初にイスラエルとの国交を開いたエジプトでさえ、いまだに国民がイスラエルに観光にでも行こうものなら、帰国後、スパイではないかと疑いの目を向けられるという。また、イスラエルの出入国スタンプを押したパスポート所持者の入国を政府レベルで拒否している国も多い。

はじめての中東旅行であった香田さんが、そのことを知らなかったのは不幸であったかもしれない。》

イスラエルを北朝鮮に置き換えて把握すると、アラブ諸国にとってのイスラエルがどのような存在であるかが少しは理解できるかもしれない。北朝鮮を経由した外国人が日本入りすれば、全く無防備な日本といえども、さすがに安閑(あんかん)としてはいられないだろう。ましてやイラクは戦場になっており、自衛隊が派兵されている地域なのである。だから犯行者が、「一体どんな旅行者がいまのイラクにいるというのだ！　ここは戦場だぞ！」というのを聞くと、香田さんがいくら民間人の旅行者だと主張しても、聞き入れられる筈がないのは当然だろう。ニュージーランドに行くようにしてイラク入りするなんてことは、誰にも通用しない話である。

《香田さんが誘拐されたハイファ通り周辺は、バグダッド市内でももっとも危険な場所のひとつで、米軍ですら容易には入れないため「NO　GO　ZONE」と呼ばれている地域だ。

ここは、フセイン時代、政府高官やエリート層である医者や学者が特権として与えられたアパートがある高級住宅街だったが、政権崩壊とともにこれらの住民が去り、替わりにアラブ諸国から流れ込んだイスラム過激派や武装勢力が住み着いた。

彼らは米軍の戦車や装甲車が入れない狭い路地にある家屋を武器庫や隠れ家としながら、隣接した「グリーンゾーン（米英の大使館やイラク暫定政府の政庁が集まる地域）」に出撃したり、迫撃砲を撃ち込んだりしている。反米勢力の最前線基地であることから、「リトル・ファルージャ」とも呼ばれている。

そこを歩きながら写真を撮っていたという行為は、やはりみずから危険に飛び込んだと言われても仕方がない。》

筆者もそう書くように、平時のイラクではなく、戦時下のイラクで香田さんは危険地域を《歩きながら写真を撮っていたという行為》が、彼らにスパイとみなされるのはどうみても当然であったとしかいいようがない。しかし、香田さんが正真正銘通常の旅行者であったのだから、我々日本人も驚いたが、世界中の人々は犯行者も含めてもっと驚いたに違いない。《なぜ香田さんが危険に満ちたイラクに出かけたのか》、誰もが不思議がり、筆者もその理由を知ろうとするが、明確な答えはみえてこない。したがって、《話を聞けば聞くほど、彼は日本のどこにでもいる、心優しく、活動的な一青年だったとしか思えない。実際、彼のように十分なお金も持たず辺境や危険地帯を旅する青年たちはいくらでもいる。／しかし、香田さんの場合、アラブ・イスラム世界の常識を知らずにイラクに行ったことが悲劇につながった》という結論に落ち着くことになる。

０４．１２．１１付朝日の「私の視点」蘭に、国際基督教大学生・赤尾邦和が香田さん事件について、同じイラク入りした若者の立場からの感想を投稿している。

《イラクで香田証生さんが殺害されてからひと月が過ぎたが、私の心には今も、香田さ

んに対する世間の風当たりの強さが納得できないままに残っている。
香田さんのイラク入りが人助けでなかったためか。援助関係者でもジャーナリストでもない学生だったからだろうか。香田さんの計画は確かに甘かったかもしれない。しかし、そんな落ち度だけで彼の死を「しょうがなかった」と片づけることはできない。
彼への批判の最たるものは、入国が「イラクを見てみたかった」という軽い動機だったことだろう。しかしこの気持ちは、イラクをめぐる国際問題に無関心なら、まず生まれることはない「純粋な好奇心」ではなかったかと思う。
昨春、香田さんのような好奇心からイラクに入った若者の一人として、彼の思いを代弁させてほしい。
今の日本では、「戦争」を実感できることはほとんどない。だから、大半の人が中東を自分の問題意識として位置づけることもないだろう。彼は、イラクの現状を自分の目で見て、人々と話したいと願ったのではないか。彼を批判する人で、彼以上にイラクの現状を心に留めている人はどれほどいるのだろうか。
私もイラクに足を踏み入れることで、ここの人々にもハンバーガーを食べ、ペプシコーラを飲む生活があることを初めて知った。サッカーが大好きで中村俊輔のファン、という少年にも出会った。友だちができたこともあって、何とかしてイラク問題にかかわりたいと思った。そして、戦争を迎える最後の時に、若者たちが世界に向かって叫んだ声を、「イラク高校生からのメッセージ」という本にまとめた。
２０歳前後の何の肩書もない若者でも、純粋な好奇心や無鉄砲だと思えるような行動力から、時にジャーナリスト以上の力を発揮することができる、と私は信じている。
彼の行動をすべて肯定するわけではないが、彼の無鉄砲ながらも純粋な行動をもっと大きな見地からも、とらえてほしかった。
イラクでは今日も理不尽な戦闘状態が続いている。香田さんの父親が「解放されれば、世界平和の建設を真剣に追求する人間になる」などと語った言葉が心に残る。将来、イラクのために力を発揮するかもしれなかった若い命が、断たれたことだけは間違いない。》
香田さんと同様に、《「イラクを見てみたかった」という軽い動機》で、自分もイラク入りした体験から、香田さんに対する批判を自分自身に対する批判として受けとめようとする場所に立って、感想が綴られている。なぜ、イラクなのかという、香田さんを含むイラク入りする若者たちに向けられる疑問に対して、《今の日本では、「戦争」を実感できることはほとんどない》と答えているようにみえる。《「戦争」を実感できる》ということは、橋田さん流にいえば、死にたえず直面している《極限状態が、逆に生きている実感を与えてくれる》ということにほかならない。「戦争」を実感できない日本とは、《自分は確かに生きているのだと実感することはむずかしい》日本ということだ。香田さんも自分も、「生きている実感」を摑みたくて戦場のイラクに踏み入ったが、香田さ

んはあまりにも無防備すぎて拉致され、殺害されたが、《彼の無鉄砲ながらも純粋な行動をもっと大きな見地からも、とらえてほしかった》というのが、投稿の趣旨である。

橋田さんもそうだが、香田さんの行動や先の投稿文から逆に窺えるのは、イラクで「生きている実感を味わわざるをえなくなるほどに、我々が住んでいる平和な日本は生の手応えが感じられなくなった、「つまらない」日本になってしまったということだ。この思いは、傭兵を２１年間勤めてイラクで戦闘死した斎藤昭彦の経歴を一瞥しただけで、よりくっきりと浮かび上がってくる。高校中退後、自衛隊に入隊し、２年間陸上自衛隊屈指の精鋭部隊である第１空挺団で勤務し、除隊後にフランスの外国人部隊で２１年間在籍した。昨年１２月、英国の警備会社と契約を結んでイラク入りした。おそらく斎藤さんは自衛隊の精鋭部隊で過酷な訓練に耐えてきたが、それを活かすために外国人部隊に勤務し、そしてイラクにやってきたのだと思われる。平和なだけの「つまらない」日本の中に自分の居場所がないのがわかって、戦場を目指したのだろう。

なぜ、若者はイラクを目指すのか、という問いは、なぜ、若者は日本から飛び出すのか、という問いに取って代わられねばならない。つまり、若者の視線はイラクを目指すことよりも、日本から飛び出すことに重心が置かれているからだ。香田さん事件は更に、次のような問題点を浮き彫りにしていた。日本から飛び出すことに夢中なあまり、目指した先の危険な状況に対して無知と盲目を曝けだし、命を失う羽目に陥ってしまったのだ。飛び出す先がみえなくなるほど、注意と関心が払えなくなるほど、日本の社会の「つまらなさ」に押し潰されそうになっていたのが感じられる。香田さん殺害の実行犯が言い放った、「一体どんな旅行者がいまのイラクにいるというのだ！　ここは戦場だぞ！」という言葉は、香田さんがぶらりと自分の世界の中を歩きまわっていたことを浮かび上がらせていたし、自分の世界の中の旅が打ち破られたとき、彼は現実の中で死なねばならなかったのだ。

宮台真司は０５．２．２２付朝日に、「成熟社会のつまらなさ」がいかに深刻であるかについて、書いている。

《「見知らぬ者たちを信頼する」という作法が近代社会のベースだ。しかしこの信頼には根拠がない。信頼してみたら裏切られなかったからまた信頼するという循環があるだけだ。この信頼に、地下鉄サリン事件は大きな損傷を与えた。

事件後の９５年６月、オウムに惹かれる若者を論じた「終わりなき日常を生きろ」を出した。主題は成熟社会の「つまらなさ」にある。しかし当時の僕は、問題の深刻さを見通せていなかった。

オウム信者の特徴がある。まず、かつての宗教と違い、「貧・病・争」の激烈さを背景としないこと。次に、世を考え抜いた末の神秘主義でなく、誰にでも生じうる神秘体験に軽薄に吸引されること。

要は、つらいのでなく、つまらないから、現実を全否定し、別の世界を夢見た。それを多くの人々が直感したから生々しく感じた。実は人々もつまらなさを知っていたのである。特に若者たちは「まかり間違えば、自分がそうしていたかも」と感じ、他人事として切り離せなかった。

先進国は７０年前後に物の豊かさを達成し、後期近代、つまり近代成熟期に移行した。「革命で世界を変える」という発想はリアルさを失い、「システムの外」は想像不能になった。他方、地域や家族の空洞化で社会の流動性が上昇し、個人はますます「入れ替え可能な存在」になる。つまらなさの感覚は、こうした流れが広げたものだった。

９０年代前半から広がる「ブルセラ・援交」の子たちに僕は「軽々と生きる」新世代の可能性を感じた。社会の流動性が高まっても、「やりようで」若者たちが感情的安全を得られると思ったのだ。

見込み違いだった。彼女らの多くは疲れ、メンヘラー（精神科に通う人）になった。付き合いが苦手というより、つまらないから退却するというタイプの引きこもりも増えた。僕は、成熟社会のつまらなさの問題をより深刻に受け止める必要に迫られた。高い流動性がもたらす殺伐さをどうするか。それが、課題としてこの１０年で明確になってきたことだ。

問題は国際的だ。９・１１テロはただの宗教的蒙昧（もうまい）ではない。実行犯は留学経験を持つインテリで、テロ組織の指導者層にも留学組や金持ちなど近代の恩恵を知る者がいる。彼らは近代を知った上で「実りがない」としたのだ。

国際テロの背景に原理主義があるとされるが、核心は先進国の近代化が周辺に蓄積した「歴史的怨念」と、近代を知った上でつまらないとする「再帰的（あえて選ぶ）感受性」だろう。「狂信は怖い」というとらえ方は誤りだ。

つまらなさは深刻だ。若者から見れば、政界のトップも経済界のトップもつまらなさそうな顔に見える。トップか否かに関係なく、数少ない「面白そうに生きている人」に注目が集まっている。そこに処方箋のヒントがある。

この１０年で気になることは、監視と排除を求める気分の増大だ。人々は客観的安全より主観的安心を過剰に求め、実効性の疑わしい施策に群がっている。監視や排除が不信や怨念を増加させる悪循環に無頓着で、近代のベースである信頼の構築にも関心が低いままだ。「つまらなさをやり過ごすために不安を消費している」と僕には見える。

つまらなさゆえにハルマゲドン幻想を持ち出して不安を消費する……それがオウムだった。事件が教えたのは、そんな生き方は危険で滑稽だ、ということだったはずだ。（聞き手・塩倉裕）

皮肉なものである。経済的な豊かさを求めて戦後を突っ走ってきたのに、それを手に入れた成熟社会は「つまらなさ」を極めた。成熟社会はなぜ、「つまらない」のか。「日

付のない〈祭り〉」を噴出させる我々の日常的な狂気と破壊願望を根こそぎにしてしまったからだ。いいかえると、雑草がはびこる余地をなくして、地面をすべてアスファルトコンクリートで舗装してしまったからである。個人としての生のリアリティーの喪失が、個人をますます「入れ替え可能な存在」にしていったことも、「つまらなさ」の感覚に拍車を掛けた。そんな中で宮台真司が注目したのは、「ブルセラ・援交」少女たちであった。少年たちが自他を破壊することで「生きている実感」を手に入れようとしているのに対して、少女たちは大人の性的なまなざしを逆用するかたちで、《「軽々と生きる」新世代の可能性を感じ》させているように、彼の目に映ったのだ。《社会の流動性が高まっても、「やりようで」若者たちが感情的安全を得られる》と、彼は思ったのである。

援交することで少女たちが「成熟社会のつまらなさ」に耐えられるなら、切り抜けられるなら、援交を肯定してもよいということだ。しかし、その判断は《見込み違い》で、《彼女らの多くは疲れ、メンヘラー（精神科に通う人）になった。》少女たちもまた、「つまらなさ」から逃れることはできず、自分たちの身体を消費し、心を破壊するだけに終わってしまったということである。彼女らの「軽々と生きる」格好の裏面で、言葉にならない叫びが幾重にも折り重なっていったと形容できるかもしれない。援交叩きで「つまらなさ」を何とかできるほどやわではなく、改めて《つまらなさは深刻》であることを考えさせられた、と内省しているのだ。「つまらなさ」は国際的であり、《留学経験を持つインテリ》の９・１１テロ実行犯が、《近代を知った上で「実りがない」とした》ということは、成熟社会は生きるに値しない「つまらなさ」と断定したということである。

宮台真司の指摘する「成熟社会のつまらなさ」が、経済成長の果てに行き着いた消費社会がもたらす廃墟のイメージと一体化しているとして、消費社会のど真ん中で生まれ育ってきた若者の「どこかに行けそうでどこにも行けない」苦悩の現実を少しでも知るために、７０年代以降に開花していく「こんな筈ではなかった」消費社会の歩みを一瞥しておこうと思う。０５．６．８付神戸掲載の「戦後の風景」（共同通信記者・金子直史）は、「成長の夢」を次のように追っている。

《『家族』と『幸福』の戦後史」などの著書がある消費社会研究者・三浦展によると、戦後日本の幸福な家庭像をけん引したのは、米国の豊かな生活のイメージだった。

「三種の神器」と呼ばれた家電製品の普及を経て、「ニューファミリー」に象徴される消費社会が成立。その後、出窓を持ち「ショートケーキハウス」とも呼ばれた洋風住宅が、拡大する郊外社会を彩っていった。

「米国ではすべての人間に豊かさをという民主主義の発想が、大衆消費社会を成立させた。日本では所得倍増がそれを実現し、消費のみで自立する都市圏郊外が８０年代に広がっていく」》

今にして思えば、「６０年代の昂揚」は到来しつつある大衆消費社会に対する、革命

的ロマンティシズムに依拠した反乱にほかならなかった。「革命で世界を変える」という発想を信じることのできた最後の時代であった。つまり、「革命で世界を変える」ことを信じて生きるか、それとも、「米国の豊かな生活のイメージ」にたぐり寄せられていく大衆消費社会を素直に受け入れて生きるか、そのいずれかの岐路に当時の我々は立たされていた、というわけではけっしてない。我々が「革命で世界を変える」ことを信じて生きることのできる生活基盤を与えてくれたのは、ほかならぬ到来しつつある大量消費社会であった。過激な学生運動に多くの学生が大衆的に参加することができるほどに、豊かな消費社会が着々と広がりつつあったのだ。生活を背負っているわけではない学生たちは、自分たちが消費社会の大波に呑み込まれかねない危機を敏感に感じ取っていた。彼らの言葉でいえば、自分たち大学生が高度な資本主義社会における上級労働力商品の担い手になる危機感であった。

消費社会への加速が促す大学の大衆化という基盤がなければ、６０年代末に噴出した大規模な学生の反乱は起こりえなかった。学生たちはおそらく自分たちの足下に忍び寄りつつある消費社会の足音を直視しなかったが、たえず身に感じていた筈だ。この到来する消費社会に呑み込まれないためには、「革命で世界を変える」という発想にしがみつく以外になかった。いわば「革命」の発想は、迫りくる消費社会の勢いに追い上げられていく学生たちが消費社会に呑み込まれないために、最後の拠り所とせざるをえないロマンティシズムであった。この事態は消費社会の側からいえば、大衆消費社会を社会の隅々にまで浸透させて完全化していくための、つまり、団塊の世代である学生たちを「革命」の夢想から引き剥がして消費社会推進の強力な担い手とするための、最後の総仕上げにほかならなかったといえるかもしれない。

学生たちは「革命で世界を変える」という発想をもって、進行しつつある消費社会に抵抗したというよりも、順調な経済的発展を刻み込みながら「モノの豊かさ」を目指している消費社会の魅力を感じ取るなかで、まだ見ぬ「永遠の革命」を思い描く以外に抵抗する術はなかったのだ。もし最後の抵抗を試みようとするならば、だ。もちろん、これは矛盾であり、欺瞞であった。自分の生活が消費社会に染まっているのを知りながら、いや、知っているからこそ、その現実を振り払うようにしてより一層過激に頭の中でのみ「革命」の観念を追求していかざるをえなかったからだ。勝負は初めから目にみえていた。少しも革命的ではないが、無意識の現実の歩みが意識的な「革命」の夢想に打ち負かされたという例は、歴史上一度もあった試しはなかった。消費社会につながる生活に取り囲まれるなかでの「革命」行動が、現実的な力を持つこともありえなかった。

もし本当に消費生活に呑み込まれたくないと願うなら、消費生活につながる一切のプラグを抜かなくてはならなかった。「革命で世界を変える」ためには、なによりもまず自分の生活を変えるたたかいから着手しなければならなかった。しかし、消費生活に組

み込まれないような生活の仕方は可能なのだろうか。そうやって人は生きていくことができるのだろうか。その問いの前で誰もが躊るほかないが、ただ明らかなことは、「革命」はこの困難な問いを避けてはありえないことである。６０年代末の闘争を激しくたたかうなかで、学生たちはこの自問に向き合うことを迫られていった筈だ。なんのことはない、どのような闘争もそれが本質的で根底的であればあるほど、外に放った問いはブーメランのように最も困難な問いとして自分に返ってこざるをえなかった。このとき、「革命で世界を変える」という思いの無邪気さは、自らの喉元に突きつけられた刃に取って代わっていたのだ。

たたかえばたたかうほど困難な問いに見舞われるなかで、学生たちは「革命で世界を変える」という発想を持続できなくなり、戦線からの離脱を余儀なくされていった。自分の生活を変えるたたかいを展開する気は毛頭ないが、到来する消費生活の「空っぽ」には耐えられないとして、自衛隊に乗り込んで自決してみせたのが三島由紀夫であった。「革命で世界を変える」という発想を維持しながらも、自分の生活を変えるたたかいのなかで「革命」を展開するという方途を取らない者たちは、消費生活に呑み込まれていく日本での「革命」の困難さを見て取って、消費生活に覆われていない世界の後進地域である北朝鮮やパレスチナへと散らばって行った。連合赤軍として国内で結集した一部の学生たちは、消費生活が及ばない山奥に籠もって自滅していった。凄惨な連合赤軍事件によって「革命」幻想が完全に消え去ってしまったかのようにみえるかもしれないが、本当は消費社会の到来によって断たれてしまった「革命」幻想のなかで、最後の抗う学生たちが息の根を止められてしまったといえるだろう。

《消費社会は、人々にどんな現実をもたらしたか》、先の神戸の記事はこう分析していく。

《「広告都市・東京」などの著書がある東大助教授（社会学）の北田暁大は「高度成長は夢を追い掛けた時代で、極点に大阪万博があった。豊かさを疑う場合も、それを否定する理念に基づいていた。しかし消費社会では夢や理念が力を失い、消費社会そのものの中に自分たちを肯定する論理を、見出そうとするようになる」と分析する。

北田は高度成長での万博に対する消費社会の象徴として、８３年に開業した東京ディズニーランドを挙げる。「二つは豊かさの象徴とされるが、万博がその外側に未来を夢見させたのに対し、ディズニーランドは外を忘れて内に浸る閉じた空間。消費社会はまさにそういうもので、そこで『未来』が消えていった」

それは人間の自己意識にも影響を及ぼした。「それまで人のアイデンティティーは、住む地域や階級などによっていた。それが、皆が同じでヨコナラビという中流幻想が力を持つと、指標としての意味を失う。人は消費によって小さな差異を競い、自分らしさを捏造せざるを得なくなる」

だれもが求めた平等な社会を実現したがゆえに、人が強迫的な「差異化のゲーム」に

陥る逆説。だが北田によるとこの消費の風景も、バブル崩壊を経て９０年代半ば以降に微妙に変質する。

「差異化のゲームはどこかで平等幻想の上に成り立つ競争の論理。しかし階層格差が意識されると、それに対する違和感が出てくる。ゲームの前提をだれもが共有するとは信じられなくなる」》

消費社会の到来は戦後社会の貧困にとって、大きな「夢」であったということを忘れてはならない。しかし他方で、戦後社会の貧困と悲惨が日本の敗戦という事態からもたらされたことを踏まえて、世界的な大戦を必然とする資本主義のメカニズムを別のメカニズムに取り替える根本的な治療を必要とする、「革命」という夢をも引きずっていた。二つの「夢」は両立しがたかったから、消費社会の夢を実現するためには「革命」の夢を除去しなくてはならなかったし、逆に「革命」の夢を追いかけるためには消費社会に抗いつづけなければならなかった。消費社会の夢か「革命」の夢か、というこの問題は、経済的な豊かさの枠組みのなかにすべてを閉じ込めるか、それとも、どんな枠組みのなかにも閉じ込められない永遠の課題を手放さずに生きるか、という問題を象徴していた。６０年代末の大学闘争はそのような、手を伸ばせば「モノの豊かさ」を実感できる現実を願うか、あるいはまだ見ぬ世界を追いつづける志向性か、という切羽詰まったたたかいとして繰りひろげられたのだ。

「モノの豊かさ」に憧れて勤勉に働きつづけてきた人々が、消費社会を待ち望んだようにして受け入れていったのは必然だった。遂に消費社会の到来は、「革命」幻想に象徴されるあらゆる実体なきロマンティシズムを葬り去っただけでなく、消費社会の夢をもそれを実現することによって奪い取ってしまった。消費社会とはそれまで消費の対象として迫り上ってこなかったあらゆる領域をも消費の対象とすることにより、消費社会には消費されることのない「外部」は存在しなくなった。人間の内臓等がパーツとして商品売買されている現実を一瞥（いちべつ）するまでもなく、人間そのものが消費の対象となることによって、人間が関係するすべてのことが、たとえば、戦争や家族の領域までもが商品化され消費されるようになってしまったのだ。消費社会に聖域は存在しないことによって、人は消費社会のなかで生きること自体が消費行為として年を取るようになってしまった。

消費社会がこれまでのどの社会とも異なるのは、自らが自らを消費行為として食い尽くす点にあるとみられる。消費社会のシステムに「外部」がなくなるとは、そういうことである。７０年の「万博がその外側に未来を夢見させた」のは、万博がその到来を示唆した消費社会そのものがまだ人々にとって夢の段階にあったからだ。だが、１３年後の８３年に開業した東京ディズニーランド時代の成熟した消費社会は、もはやその内部でしか人々に夢を見させなくなった。つまり、人々の夢は消費行為の実現においてしか成り立たなくなった。「ディズニーランドは外を忘れて内に浸る閉じた空間」として存

在するように、消費社会もまた、「未来」という言葉を消費行為のなかに閉ざしていったのである。いいかえると、消費社会は人間の未来をも消費することになったのだ。そうなると、「人は消費によって小さな差異を競い、自分らしさを捏造せざるを得なくなる」。

しかし、平等幻想の上に成り立っていた「差異化のゲーム」という競争の論理は、バブル崩壊以降、平等幻想が崩壊し、階層社会の徴候が目立ち始めると、「ゲームの前提を誰もが共有するとは信じられなくな」った。「差異化のゲーム」から脱落する階層が出現し、その階層の若い世代がフリーター、ニート、ひきこもりなどのかたちをとって、消費社会を脅かし始める。消費社会において人は消費行為によってしか他人との差異を競えないということは、裏返せば「差異化のゲーム」のなかで誰もが均質化されてしまうことを意味する。宮台真司のいうように、個人はますます「入れ替え可能な存在」になっていく。均質化され、「入れ替え可能な存在」になっていくのは、だが人間ばかりではない。消費社会は風景をも消費していくことを、神戸の記事は取り上げる。

ノンフィクション作家の吉岡忍は、《取材の中で日本の風景がどこも非常に似通ってきているのに気づく。

「静かで清潔で、豊かさの〝上がり〟のような町が広がっていた。外の視線を失い、土地の歴史も感じさせない空間。そこではすべての尺度が等価で、人を根拠付ける基準が見えなくなった」

三浦は今も各地に広がる郊外化の動きを「ファスト風土化」と呼ぶ。「それは、大都市圏近郊の郊外社会とも違う。今起きているのは都市圏郊外のモデルがパッケージとして広まり、土地の歴史を遮断し異物を消去した均質空間が、至る所に作られる事態。町は壊れ、蒸発していった」

そこで見えてくる人の心の風景は…。「郊外型ショッピングセンターに象徴される身もふたもない便利さへの志向が、社会を覆い始めた。都市は他者とともにいる空間としての意味が希薄になり、人はケータイで別の場所にいる他者と、過剰につながろうとする」と北田は言う。

蒸発した町、都市空間の中で、人はどのように自らを確かめていくことができるのか。私たちはその問いを胸に、豊かさの果ての風景をさまよい始めている。》

蒸発していくのは町や都市空間だけではない。なによりも「人」そのものが蒸発していっているといえよう。深刻な「成熟社会のつまらなさ」のなかで、若者は社会の外へ飛び出そうとするか、それとも社会の内に隠れるようにしてひきこもるかたちで、消費社会に抗っているようにみえる。その抗いが自滅への途をひた走っているように感じられるけれども、自滅しない抗い方を若者を含む我々がはっきりと提示できなければ、我々は消費社会のなかで消費され尽くした廃棄物として野垂れ死にする運命を免れないだろう。

２００５年6月１１日記